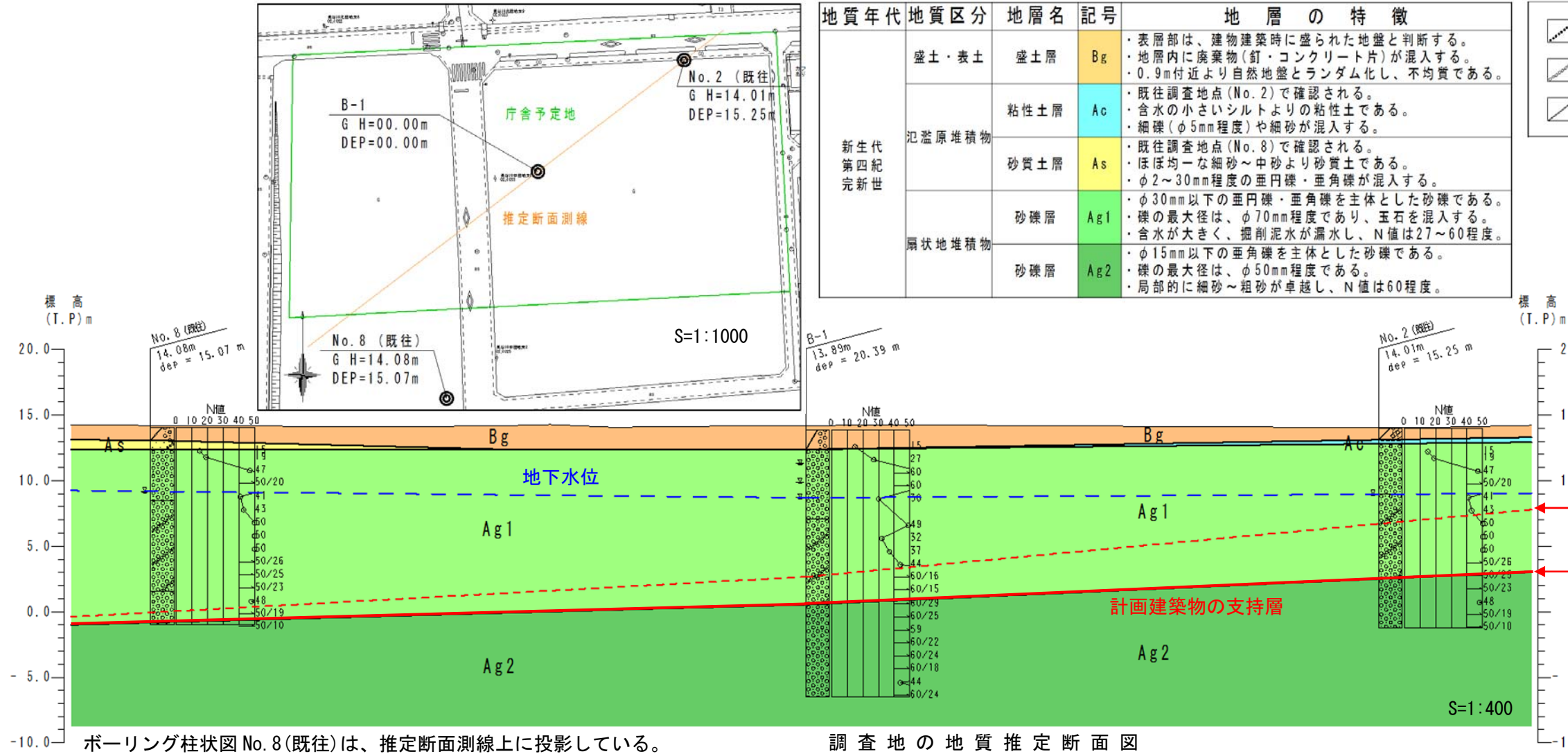


地層凡例

簡略柱状凡例

地質年代	地質区分	地層名	記号	地層の特徴
新生代 第四紀 完新世	盛土・表土	盛土層	Bg	・表層部は、建物建築時に盛られた地盤と判断する。 ・地層内に廃棄物(釘・コンクリート片)が混入する。 ・0.9m付近より自然地盤とランダム化し、不均質である。
	氾濫原堆積物	粘性土層	Ac	・既往調査地点(No.2)で確認される。 ・含水の小さいシルトよりの粘性土である。 ・細礫(φ5mm程度)や細砂が混入する。
		砂質土層	As	・既往調査地点(No.8)で確認される。 ・ほぼ均一な細砂~中砂より砂質土である。 ・φ2~30mm程度の亜円礫・亜角礫が混入する。
	扇状地堆積物	砂礫層	Ag1	・φ30mm以下の亜円礫・亜角礫を主体とした砂礫である。 ・礫の最大径は、φ70mm程度であり、玉石を混入する。 ・含水量が大きく、掘削泥水が漏水し、N値は27~60程度。
砂礫層		Ag2	・φ15mm以下の亜角礫を主体とした砂礫である。 ・礫の最大径は、φ50mm程度である。 ・局部的に細砂~粗砂が卓越し、N値は60程度。	

	礫混じり		シルト
	玉石混じり		砂
	盛土		砂礫



地盤の卓越周期	
【常時微動測定】	0.11~0.19 秒付近 (第I種地盤) 0.21~0.34 秒付近 (第II種地盤)
【推定式(道路橋示方書)】	【Ag1層】 N値 50 以上かつ S波速度 500m/s 以上 【Ag2層】 N値 50 以上かつ S波速度 500m/s 以上

ボーリング柱状図 No. 8(既往)は、推定断面測線上に投影している。

調査地の地質推定断面図

調査地盤構成層の特徴

※1 対象地盤のN値は既往資料を参考とする。
※2 貫入不能・N値60以上はN値60と表記。
※3 推定式による推定値。

地層名 (記号)	分布状況	標準貫入試験	密度検層	PS検層					孔内水平 载荷試験	単位体積重量 γ (kN/m ³)	粘着力 c (kN/m ²)	せん断抵抗角 ϕ (°)
		N値 [代表N値]	密度 ρ (g/cm ³)	P波速度 Vp (m/s)	S波速度 Vs (m/s)	ポアソン比 ν	剛性率 G_0 (MN/m ²)	ヤング率 E_0 (MN/m ²)	変形係数 E_0 (MN/m ²)			
盛土層 (Bg)	地表から深度1.5m付近まで分布する。 深度0.9m付近より自然地盤と不整合化する。 下位面は、場所によってAc層、As層、Ag1層と接する。	15 [15]	1.99	480	190	0.407	71800	202000	10.500* ³	19	0	35* ³
粘性土層 (Ac)	調査地の北東~東側に分布する。 Bg層の下位に位置し、層厚は最大で0.5m程度である。 レンズ上をなし、深度2.0m付近(標高13.0m)まで分布する。	— [1]* ¹	—	—	—	—	—	—	0.700* ³	14* ³	6* ³	0* ³
砂質土層 (As)	調査地の西側に分布する。 Bg層の下位に位置し、層厚は最大で1.0m程度である。 レンズ上をなし、深度2.0m(標高13.0m)付近まで分布する。	— [16]* ¹	—	—	—	—	—	—	11.200* ³	19* ³	0	32* ³
上位砂礫層 (Ag1)	深度2.0m(標高13.0m)付近から、調査地全域に分布する。 層厚は10~13m程度であり、Ag2層との境界は北東から南西にかけて、若干の勾配を有す。	27~60* ² [40]	2.03~2.05	600~2300	230~520	0.410~0.478	107000~ 554000	304000~ 1630000	13.882 (GL-6m)	19	0	38* ³
下位砂礫層 (Ag2)	調査地北東部では、深度11.0m(標高3.0m)付近から分布し、南西部では、深度15.0m(標高-1.0m)付近から分布する。 調査地中央部において、層厚5.0mを確認する。	44~60* ¹ [50]	2.04~2.05	2300~2620	520~750	0.478~0.473	552000~ 1150000	3340000	42.000* ³	20	0	37* ³